

n e w o

vol. 1

桜
居
志
連

村
高
光
一

海
島
花

はじめに

「東日本大震災」

甚大な災害だった。

この本は、それをきっかけとして企画された。

『私たちみたいな、素人が、どうすれば被災地の方々を支援できるだろうか』

そう思ったのがきっかけだった。

だから、この本を作った。

——被災地の方々にこの本で元気を出してもらいたい。

私たちはそう思っています。

そして、私たちも含めるほかの方々。

私たちにできることといえば、募金ぐらいしかありません。
だからこそ、募金をしてもらいたいです。

これは一冊の「本」。

いや。

これは一冊の「電子書籍」。

「本」ではなくて、「電子書籍」。

「東日本大震災」があった。

あれが、時代の節目だったのではないかと思う。

3月11日。

あの日から——あのときから——

時代は変わった。

今こそ、「時代の転換期」。

だからこそ、私たちは新たな一歩を踏み出す。

執筆者一同

あ
の
日
の
思
い

海^う
島^み
花^{しま}
^は
^な

僕はとても広い中庭にある桜の木の下で寝ころんでいた。

僕は飯田直紀いいたなおき現在高校二年生。そしてここは桜ヶ丘高校、今は十時で授業中なのだが僕はサボっている、でも決して僕は勉強が出来ないからではない、ただなんとなくサボっているだけである。

僕は桜の木の根っこを枕のようにして寝ころび桜を見ていた。いつもなら「あ、咲いてるなー」と思うだけで、横を素通りしてしまうがこう、ちゃんと見ると、とても綺麗なものののだなと思った。日の光に照らされ、少し輝きを見せていて、風が吹くと蝶が舞ったようにふわりふわりと飛んでゆく。なんて綺麗なんだろう。僕は体を起して少しのびをした、すると一枚の花びらが頭にふわりと落ちてきた。

手に取るとふと、小さい頃よくこの時期になると遊んでいた

遊びを思い出した。それは桜を地面に着く前に取るという簡単なもので、僕は少し懐かしく思った。僕が少し懐かしんでいると、一人の少女がこちらにやってきた。見た目は、小柄でショートカット。眼鏡をかけていて真面目そうな印象を受けた。

「あの、隣いいですか？」

「あ、どうぞ。」

彼女は礼をすると僕の隣に座り、持っていた本を読み始めた。僕は少しドキドキしながら座っていた。

時間が過ぎてゆく。

しばらくすると彼女は本に目を落としたままこんなことを聞いてきた。

「ねえ、何でサボっているの？」

「えっ。」

僕は急に聞かれて少し驚いた。

「なんでって、まあ、なんとなく。」

「へえ。」

「君は？」

「私？私はねこの学校の授業が退屈だからサボっているの。」
不思議な子だと思った。

——パタンツ

彼女は急に本を閉じこちらを向いてきた。
目が合った。

彼女の瞳はとても綺麗で吸いこまれそうだ、そして透き通る
ような白い肌に花が咲いたようにほんのりと赤く染まった頬。
なぜか胸がドキドキする。とても、可愛い……

「可愛い……」

「えっ。」

はっとなりつい心に思ったことが口に出てしまった。

僕は彼女の方を見ていられなくて顔をそらしてしまった。し
ばらくすると彼女はまた本を読み始めた。僕は横に寝っ転がっ

た。顔が熱くなっているのがわかる。

そしてなぜこんなにも胸がドキドキするのだろうか。よくわからない。

心地よい風が吹き僕を眠りへと誘う、その時桜が舞い散り青々と広がる春の空へと消えていった。

2

「んっ……」

ふと気がつくと時刻はもう十一時を過ぎている。僕はいつの間にか寝ていたらしい。

「やばいっ！」

もう次の授業は始まっている。土をはらい僕はふと隣を見ると彼女はもういなかった、どうして起きてくれなかったのだろう……。

そんなことも考えながら僕は急いで教室へ向かった、今の授

業は確か数学なはずだ。数学の先生はとても真面目で授業中おしやべりなどをしてしていると厳しく怒られる。こんなサボって授業の途中で行ったら怒鳴られるだろう。

教室へ行くともうみんなは席に着き静かに先生の話を真剣に聞いている、もう授業は始まっている。

「サイアクだ……」

僕はもう一度中庭に戻ろうとしたが戻る気力もないのでそおつと後ろのドアを開けた。幸い先生は黒板のほうを向いていてばれなかったが、クラス一の馬鹿池田奏太が

「おっ！お前どこ行ってたんだよ！先生っ直紀がサボりから帰ってきたぞ！！」

サイアクだ。そう思っているといきなり先生の怒鳴り声が聞こえた。

「飯田あ！！おまえ何処行ってたんだ、前の授業の社会もサボってたんだってな、お前には言いたいことがある。この授業が終わっ

たら職員室に來い。わかったな。」

「はい。」

——クスクス。

周りから笑い声が聞こえる。

僕は先生に返事をする。と窓側の自分の席に着いた。すると後ろから「ドンマイ」と声をかけられた。声をかけた人は二人いる。幼馴染の一人、伊勢崎^{いせざき}黒だ。こいつとは小中高とも同じで今でも仲が良い。見た目はいかにもスポーツマンのような短い髪の毛で肌が焼けている。性格はいつも明るく前向きでクラスの中心的存在である。でも勉強はあまり出来なくアホである。部活はバスケット部。

「この先生の説教は長いぞ、気をつけろよ。」

と笑いながら言われた。こいつはいろんな先生から何かと叱られている。中学の頃は教室の中でキャッチボールをしていてうっかり窓を割り校長先生などの先生からこっぴどく叱られた。

かわいそうな奴だ。

「忠告どうも、説教魔。」

「せつ、説教魔って！！」

「おい、そこうるさいぞ！伊勢崎お前も職員室来るか！！」

僕は内心ざまあ見ろと思った。

結局、黒と先生の口論のせいで残りの授業時間のほとんどを使ってしまった。そして黒も職員室に来ることになったらしい。ほんとにかわいそうな奴だ。

3

「ふっ、ああ、疲れたあ。」

「なあ、言っただろ説教長って。」

僕と黒は授業が終わった後職員室に行き、先生にこっぴどく叱られた。もう昼食の時間は少ししか残っていない。僕たちは急いで教室に戻り昼食を食べた。

チャイムが鳴り昼休みが始まった。教室内が騒がしくなってきた。黒は何やら急いで教室を飛び出していった。どこへゆくのだろう。僕はあまりやることはなく暇なので中庭に行くことにした。

中庭に行く途中、サボった時隣にいた女の子のことを思い出した。さらさらなショートカット、吸いこまれそうな黒い瞳、ほんのりと赤らめた頬……。僕は考えるだけで顔が赤くなるのがわかった。名前はなんていうのだろう、何で聞かなかったのだろう。今では少し後悔している。

中庭へは階段を下りすぐその曲がり角を曲がればすぐに行ける。僕は曲がろうと歩いていたらいきなり、大量な紙の山が現れ、よけようとしたがよけられず、ぶつかったしまった。

——ドンッ

ぶつかった拍子に僕は尻もちをついてしまった。

「痛つつあー。」

起き上がると辺り一面に紙が取らばっている。

「あ、すいません、大丈夫ですか？けがしていませんか？」

声のするほうに顔を向けると目の前に顔があった。

「うわあっ！」

僕はびっくりして反射的に頭を後ろに下げた。

——ガゴン

「あだっ。」

後ろに壁があったことに気がつかず、思いっきり頭を壁にぶつけてしまった。

「ごめんなさい！大丈夫ですか……って、直紀じゃん。」

「なんだよ黒か。あぶねえだろ急に出てきやがって。」

「あっ、わりい。」

僕は起き上がった。辺りを見てみると紙があちこちに散らばっている。

「黒、この紙の山どうしたんだ？」

黒のほうを見ると、床にしゃがみ紙を集めていた。

「ああ、これ？これなあ、先生から教室へも持って来いって言われたやつなんだよ。」

「ふうん。」

僕は一枚拾い、内容を読んでみた、

内容は、授業参観のお知らせである。高校生にもなって、まだあるのか。

「おい！読んでないでお前も手伝えよ、ぶつかっただから。」

「あ、ゴメン。」

僕は黒と一緒にあちこちに散らばった紙を集め始めた。

――数分後

「ふうん、何とか集められたな。」

「そうだな。」

「で、これどうする？」

「決まってるだろ、職員室に持って行くんだよ。」

「この紙の山を！？一人で！？」

僕は驚いてしまった。こんなに多い紙の量を一人で運ぼうだなんて無理がある。僕は少し黒がかわいそうになり手伝うことにした。

「おい黒待て。僕も運ぶの手伝うよ、ぶつかったんだし。」

「本当か！ありがと。んじや、上の方を適当に取ってくれ。」
「おう。」

持ってみると意外に重い。とにかく僕と黒は急いで職員室へと向かった。

何とか職員室まで運ぶことができた。先生を呼ぶと紙の山を渡し、とりあえず終わった。

「ふう、やっと終わった、ありがとな直紀っ。」

黒はそうお礼を言うのと教室へと走って行ってしまった。僕は

走って行く黒に手を振り、中庭へと歩いて行った。

この中庭は春夏秋冬、いつでも花が咲いており、この高校唯一の自慢でもある。日当たりも良くけっこう広く生徒たちからも人気である。

僕は中庭に着くと目の前に広がる花々を見渡した。今は季節の中で一番綺麗な時期である。辺りを見渡すと今日はあまりがない。いつもならけっこう人も多いのだが。僕は不思議に思った。今日の昼休みは何にもないはずなのだが……。なぜだろう。とりあえず僕は大きな桜の下に行き座り込んだ。

「ふう。」

ほんとにここに来ると気持ちが安らぐ。僕は木に寄りかかり心地よかったので目を閉じて軽く寝ていた。すると

——タッタッタッタ

「ん？」

誰か来たのだろうか、足音がする。しばらくは目をつぶって

いた、すると足音は止みかわりに水の音がした僕は誰が何をしているのか気になり目を開けた。

「えっ。」

僕は驚き、少し固まった。そこにはあの時の少女が立っていたのだ。僕が少し固まっていると、彼女がこちらを向いた。目が合う。

「あ、起しちゃいました？」

少し心配そうに聞いてきた。

「あ、い、いや大丈夫。平気。」

それを聞くとほっとしたように微笑んだそして周りに広がる草花たちに水をあげ始めた。水をあげる彼女は少し微笑み楽しそうだった。僕はこのままぼーっとしているわけ行かないので彼女に何か話そうとしたが何も浮かばない。僕が悩んでいると水の音がやんだ。顔をあげ彼女のほうを向いてみると、何やらしゃがんで何かをしていた。

「あの。」

彼女がこちらを向く。少し緊張する。

「何しているの？」

「ああ、今枯れた花を取っているの。」

彼女は少し微笑むと視線を草花に戻した。

——サワサワ

「僕も手伝うよ。」

「えっ、いいの？」

僕ははっとなり、自然に口に出てしまった。彼女は少し驚いていた。

「う、うん！手伝うよ。」

「ありがとう。」

そう言うと彼女は僕にやり方を教えてくれた。彼女の説明はわかりやすかった。やっている途中僕は彼女のほうを見てみるとせつせと枯れた花を摘んでいた。

「ねえ、いつもこうやって水やりとかをしてるの？」

「うん、私個人的にお花とかそういうの好きだから、ほとんど毎日来てるの。」

「毎日も来てるの！へえー。」

彼女は少し照れて赤くなった。それを見ると僕も少し胸がドキドキした。静かに時間が流れてゆく。

—— 数分後

「ふう終わったあー。」

僕は最後の一つを取るとその場でのびをした。

彼女のほうをみると笑顔でこちらを向いていた。

「あっ。」

少し笑うと彼女はお礼にと缶ジュースをくれた。

「あ、ありがと。」

「いえいえ、君があまりにも真剣にやってたから。」

少し笑いあった後僕は出しっぱなしだったホースをしまおうとした。

「あつ、私がやるよ。」

「えっ。」

そう言うとき彼女は僕からホースを取ると片づけ始めた。

「君はいっぱい働いたから休んで。」

僕は少し考えたが、彼女の言うとおりにし、桜の木の下で休んでいた。

自分の身長より長いホースを慣れた手つきでしまっていてゆく。すると少し手が誤ったのか水がホースから出してしまい水しぶきをあげた。

「うわあ！！！」

僕はすぐに水を止めたに行った。止める途中少しかかってしまい濡れてしまった。

それを見ると彼女はあわててハンカチを出し貸してくれた。

「ありがとう」

濡れたところを拭くと彼女に返した。途中僕は名前が気に入り聞いてみた。

「ねえ名前なんて言うの？」

「あつ、そう言えば言っていなかったね。私は渡辺咲希^{わたなべさき}呼び方は名前でも名字でもどっちでも良いよ。」

「うん、わかった。じゃあ渡辺さんで」

「了解。君は？」

「僕は飯田直紀、呼び方はなんでもいいよ、好きに決めて。」

「じゃあ、飯田君で良い？」

「うんわかった。」

そこから僕たちは何組だとかその先生がどうたらこうたらとかと、色々話したりした。

「……それでね、その先生がね。」

——キーンコーンカーンコーン

「あつ。」

予鈴が鳴った。

「じゃあ、今日はありがとね。助かったよ、また暇な時とか中庭に来てね居るから。」

「うんわかった。というか明日も来るよ。一人じゃ大変だと思うから。」

「本当に！」

彼女はそう言うのと花が咲いたような笑顔になった。

——トクン

胸がドキドキする。

「あつ、次数学だ。じゃあ先行くね。バイバイ。」

彼女はそう言うのと先に帰って行った。

「さて。」

僕も中庭を後にすると急いで教室へと戻った。次の授業は確

か理科だったような気がする。

教室へ戻り席に着くといきなり黒がやってきた。

「おい、お前昼休みあれからどこ行ったんだよ！」

「どこって、中庭だけだ。」

それを聞くと黒は少しうなだれた。

「中庭かよ。お前がいない間だけ俺が苦勞したと思っ
たか。」

僕は何が合ったか良くわからなかった。話を聞いてみると黒は、あれから教室に戻り、仲間たちとふざけているともう一人の親友、綾瀬あやせさんがやってきて色々こき使われたらしい。

さなとは、黒と同じく小学生からの付き合いで今でもけっこう仲が良い。見た目は真っ黒の長くまっすぐな髪の毛で性格はまじめで何事もはっきり物事を言い、クラスをまとめている。いつもツンとした態度。よく黒を追いかけてまわす姿を目にする。

部活は演劇部。

僕はうなだれている黒を適当にあしらい授業を受けた。だが彼女、渡辺咲希のことが頭に浮かんであまり集中できなかった。あの最後に見せた笑顔、今でも少しドキドキする。

授業が終わり帰りのホームルームのとき、僕は少し黒に相談をしてみた。

「なあ、もし女の子に胸がドキドキしたりしたらこれって恋いかなあ？」

「ぶはっ、なんだよ急に。」

「おいそこうるさいぞ。」

僕たちは怒られ謝った。すると黒が小さめの声で

「今日一緒に帰ろう。そんときしっかり聞くから」

僕はうなずいておいたが、今日は部活ないのだろうか。黒に聞こうとしたがまた注意されそうだったのでやめた。

ホームルームが終わり自分は今日、部活はないので帰ろうとした。すると黒もやってきた。

「おい、黒待てよ！」

「え。」

「一緒に帰ろうって言っただろう。」

「でもお前部活は？」

「平気。」

黒は笑顔で言うと言った。ガッツポーズをした。どうやら今日は顧問の先生の出張のため休みらしい。

夕日に染まるなか僕たちはたわいもない会話ながら坂道を歩いた。

「……んで、ホームルームのときのことだけど。」

僕は黒に聞いてみた。

「直紀。」

黒が立ち止まる。

「何にさ、急にとまって。」

「直紀、たぶんそれ恋だと思う。」

——サラァー

風が吹く。桜がなびく。

「こい？」

「ああ、そうだ。恋。」

黒は少しいたずらっぽい笑みを浮かべた。

「お前も、成長したなあ。直紀。俺は実感するぞ。」

「お前は僕の父さんか。」

それから黒からはどこで出会ったとか、可愛いのか？などとしつこく聞かれた。疲れる。

「それじゃあ、頑張れよ！直紀！」

「はいはい……」

僕らは家へと帰った。

——ドサッ

僕はベットに倒れこみぼーっとしていた。辺りはもう真っ暗になっている。

「今日はなんだか忙しかったなあ……」
目をつぶると彼女のことが浮かんでくる。

「恋か……」

僕はベットの途中で深い眠りについた。

4

次の日の昼休み、僕はまた中庭へ行き彼女の手伝いをした。

「こんにちは、渡辺さん。」

「あっ！こんにちは飯田君。また来てくれたんだ。ありがと。」
彼女が微笑む。

そして僕はその次の日も、そのまた次の日も、毎日中庭へ行った。雨の日は彼女がこちらの教室に来ては少しお話をした。僕はそんな時が好きだった。そして離れていた差も少しずつ縮まっていた。

そんなある日僕がいつものように中庭に来て水やりをしてい

ると彼女が呼んできた。

「ねえ、飯田君。」

振り向くと彼女が微笑みながらこちらを向いている。でもその微笑みはなんとなく少し曇っていた。

「なに？」

少し気になったが僕はいつものように少し微笑みながら何か聞いてみた。すると、

「ねえ、どうしていつも来てくれるの？」

「えっ。」

少し固まった。僕は少し悩んだ。彼女がじっとこちらを見ている。

「ど、どうしてかあ、特には理由はないけど……。なんで？」

聞き返すと彼女は微笑み

「ううん、何でもない。聞いてみたかっただけ。」
と言い。水やりを始めた。

——ゴロゴロゴロ

空を見上げると少し雲行きが怪しかった。

次の日、今日は朝から雨が降っていてあまり気分が晴れなかった。昼休み僕は席に着き外を眺めていた。すると、

「飯田君。」

ドアの方を見ると彼女が立っていた。でもなんとなく顔が暗い。

「何？」

「ちよっとこっち来て。」

なんだろう。なんか昨日から少し彼女の様子がおかしい…。

僕たちは屋上へと続く階段の踊り場に来了。

「で、話って。」

「あ、うん。」

彼女はうつむいている。

「あの、そのいつも水やりとか手伝ってくれてありがとね。で、

その……」

彼女は少し黙りこんだ。雨の音しか聞こえない。すると彼女は顔をあげ僕の目をまっすぐ見た。その目はどこか悩んでいる目だった。

「もう来なくていいよ中庭……」

——ザアザアザアザア

「え……」

「ということだから……じゃあ。」

何かが切れたような感じがした。

「え……。ちょ、ちよっとまって。」

振り返るともうそこに彼女の姿はなかった。

どういうことだ？来なくてよい？なぜ？僕の頭の中にははてなマークでいっぱいだった。そしてその場に立ち尽くしてしまっ

た。僕は雨の中一人、家へと帰った。

――ドサッ

僕はベットに倒れるように横になった。

「なんで？僕なんかしたかな。」

その日はとても気分が浮かなかった。

それから次の日僕はもう一度彼女に会うため中庭に行った。

するとそこには誰もいなかった。教室にも行ってみても居なかった。そしてその次の日もそのまた次の日も行って見たが居なかった。

「はあ。」

この恋もおわりなのか……。あまりにも悲しすぎる恋だった。

それから僕はあまり中庭には行っていない。そして僕の気分もあまり浮かなかった。季節はもう夏になろうとしていた。

ある日の放課後僕は普通に家に帰ろうとしたら黒に呼びとめられた。

「なんだよ。」

「おい、お前ここずっと暗いぞ？何かあったか？」

「なにもないよ。」

力なく言った。

「もしかして、振られた？」

「なっ！」

黒がニヤニヤし始める。気持ち悪い……。

「そうかそうか、短い間だったな少年よっ。」

「もう、告ってもないし。振られてもねーよ！！」

すると黒がいつもの直紀に戻ったと言い。僕は少し照れた。

「フハハハハ。でもまあなんで暗かったんだ？」

「ああ、実はな……。」

僕は何があったのかをすべて黒に話した。

それを聞いている黒はどことなく真剣だった。

「：ということなんだよ。」

「ほおー。」

黒は腕を組み少し考えていた。

「なあ、その渡辺さんはなんで急にそんなこと言いだしたんだ？」

「それが何も分からないんだ。」

「ううむ。」

また腕を組み考えている。

それにしてもなぜ彼女はそんなこと言ったのだろう。僕が嫌いだから？それとも単なるきまぐれだろうか。悩めば悩むほど良く分からなくなる。

「なあ、直紀。もしかしたらさ、彼女は他に好きな人がいたからじゃないか？」

「えっ、どゆこと？」

「要するに、彼女には他に好きな人がいて。その人が僕と居た

のを見て勘違いし、それで……。ということわかった？」

「うー、なんとなくわかったよ。」

「まあ、元気を出せ少年！また次があるさっ！」

「うぜえー。」

「なっ！せっかく親友がなぐさめてるってんのによおう。オラッ」

「あっ、イダダダダダ！やめてくれ！」

それから僕たちはふざけながら帰って行った。そしてなんだか僕の気持も少し楽になった気がする。

次の日、今日は天気が良く、空には雲一つない。

放課後、僕は久しぶりに中庭に行ってみた。

「すうー、いつ見ても綺麗だなあ。」

深呼吸をする。今は夏なので向日葵などが咲いている。僕は花々に水をあげた。久しぶりに来たので土が乾いていた。

——
ブワッ

「うわあっ。」

いきなり強い風が吹いた僕は目をつぶった

「もう何なんだよ、あっ。」

目を開けるとそこには懐かしい姿が合った。

「渡辺さ：ん。」

僕はホースを落としてしまった。辺りに水が流れる。

6

「久しぶり、飯田君。」

彼女は少し微笑み、こちらにやってくる。

「：あっ、ひ、久しぶり渡辺さん。」

なぜか少し緊張してしまう。彼女はその後と落としたホースを拾い、これまで何事もなかったように水やりをした。

このままで良いのだろうか。そんな思いが僕の中で出てきた。そして僕は思い切って聞いてみた。

「ねえ、渡辺さん！」

「ん？」

彼女が振り向く。目が合う。辺りは水の音しか聞こえない。

「なんで、あんなこと言ったの？」

すると急に彼女の顔が暗くなった。やっぱいけなかったのか？
僕は焦った、すると彼女が口を開いた。

「ああ、それはね。少し飯田君と距離を置きたかっただけ。」

「きより？」

彼女はうなずき水を止めた。辺りは静かになる。

「そう距離。あなたはあまり気づかないと思うけどけっこうあなたは女子から人気だったのよ。」

この僕が？全然わからなかった。

「それで、よくあなたと私、会ってたじゃない？昼休みとか。」

「うん。」

「それで女子から妬まれて……。」

彼女は少しうつむいた。

「ごめんなさい……」

なぜか自然に口に出してしまった。すると彼女は顔をあげた、目には少し涙が溜まっていた。

「それで私は距離をとったの。でもね……」
「でも？」

彼女は少し言葉を詰まらせた。

「でもね、私距離を取ってからわかったの。寝る時いつも目をつむるとあなたの顔が浮かんでくるの。」

一粒の涙が彼女の頬を伝った。その涙はとても綺麗だった。

「だから、だから……」

——タッタッタッタ

僕は思わず彼女を抱きしめてしまった。でも後悔はしていない。

「だから……。私はあなたのことが好きなのっ。」

彼女は僕の胸の中で泣いていた。そして少し感情おさまり。離れると、

「ありがとう。返事はいらない。私は気持ちを伝えられただけで幸せだったから。じゃあ……」

彼女は帰ろうとした。

「待って！！」

僕は思わず彼女の手を掴んだ。彼女が止まる

「ずるいよ……」

「えっ？」

「君の気持ちだけ一方的に伝えて、ずるいよ……」

「だって、私のことなんか……」

「違う、全然違う。」

自然に涙が出てくる。

「僕はあの時会ってから、ここ、中庭に来るのが楽しみだった。君に会えるから。でも……」

言葉が詰まる。

「でも、いきなりそんなもう会わないとか言われて。正直僕はショックだった。何がいけなかったのだろう、変なことでも言ったのになって悩んで。」

顔をあげ彼女を見る。目が合う。

「返事なんていらない？そんなの無理だっ」

彼女の手を引き抱きしめる。

——サアサアサ

「僕も…君のことが好きだ…。」

初夏の風が吹く辺りはもう夕焼けに染まっていた。

咲く桜は美しく、
散る桜は儚はかなげに

桜居志連さくらいしれん

※

【プログラム】

咲くよ。

桜。

桜は咲くよ。

散るよ。

桜。

桜は散るよ。

そしてまた。

この中学校には昔、大きな桜の木があった。

らしい。

この学校出身の母親から聞いた話によると——だが。

あ、でも、母親からも聞いたし、父親からも聞いたか。

つまり、こころ辺は社会が狭いのだ。要するに、近場で結婚を済ます人が多いのだ。僕の母親は、同級生の男の子——今の僕の父親——と結婚した。母親の昔の友達も、やはり——この近くに住む人や、先輩、あるいは同級生、後輩——と結婚しているのが多いらしい。

だから、母親も父親もそんな桜があったことを知っているのだ。

そして、僕は今、その学校の正門の前にいる。正門と言っているが、実を言うと、裏門の方が通行量、認知度が共に上なのだけれど。僕は学校の敷地内に入る。すると、裏門のところにいた女生徒が、

「おはようございまゝす」とのんきな声で挨拶をしてくれた。だから、僕も、「おはようございます」ときりっとして挨拶を返した。裏門から校舎へと一〇メートルほどの道がある。その、タイルなどで舗装された道の横に、大きな切り株があるのが見えた。

きっとその切り株が、母親が言っていた——『大きな桜の木』だろう。

そんなことを思いつつ、その道をすたすたと軽快な足取りで歩く。道を歩き終えると、すぐそこにまで校舎が迫っていた。なので、校舎内に入る。自分のクラス用の下駄箱が設置されている入り口から入って、下駄箱から上履きを取り出して、普通の靴から履き替える。

校舎の中は案外片付いていてきれいだ。ごみはちらほらとあるが許せるレベル。

……あれ？ 母親に聞いた話だと、中学生っていうのは掃除をき

ちんとやらないはずなんだけどなあ。まあ、あの頃とは変わったんだろ。……うん、たぶん。

教室の中に入ると、僕の大親友——西風（ならい）がいた。西風は黒板側から見て一番左の列の一番後ろの席にポツンと座っていた。なんだか見ていて寂しそうだったので、僕は自分の席にエナメルの肩掛けバッグを置いてから、西風のところへてくてくと歩いていった。

「よう西風」

「ああ、ますっちか」

「おいおい、そのあだ名は女子しか使わなかったような……」

「気のせいだよ気のせい。というか、別に商標というか、著作権なんて無いんだから使ったっていいだろ」

「まあ、そうだけど」

……とはなしを試してみたが、いまいち盛り上がり欠ける。どう

すれば、盛り上がるのだろうか。

まあ……盛り上がらないだろ。結果的に。

教室内には僕と西風、それと女子が二名ぐらい。たったのそれだけ。

まあ、最終投稿時刻までまだまだ時間があるから、みんなそのぎりぎり前まで家にいて、やばいつてなったら家を出て学校に行くんだろう。多分そうだ。いや、そうに違いない。

一人目の女子は、教室内をうろうろとしている。名前は……よくわからない。というか、見たことがないから知ってるわけがないか。あははは。

その女子は制服を校則違反の一步手前——ぎりぎりのところぐらいまで着崩していた。中学校の登校初日からよくそんなことができるなど感心している僕がいることにすぐに気がついた。

二人目の女子は……西風の横——黒板側から見て左から二番目の

列の一番後ろの席にこじんまりと座っていた。そいつは妙に制服が似合っていた。ただ、その制服はこの中学校とは違う学校の制服のようだった。この学校はセーラー服ではない。しかし、なんだかその制服は似合っていた。特に特徴はなかった。そして、本をじっと読んでいた。どういう本なのかはよく分からなかった。

本を読んでるって……つまんねやつ。
と。

その時。

そいつが、本をパタンと閉じて、本をじっと見ていた目が、ぎろつと僕の方を向いた。だらりと汗が垂れる。

——ああ……。

そいつは——すごくかわいかった。なんて表現すればいいんだろう。ええと。うーんと。髪が長くて、黒髪で、えっとえっとえーとうーん……あーもういいや！ 面倒だ！

とにかくかわいかった。

僕は氷のようにかちんこちんになってしまった。

こういうのをひとめぼれっていうんだろうか？

いや、これは『気になってる』だろうな。たぶん。

なんだか、僕はそいつに夢中になってしまいそうで怖くなってしまうた。

だから、僕はそいつから視線をずらして他のところに移した。そうすると、そいつもまた本を読み始めた。

2

今は春。

温暖な気候。

ふわふわとした、暖かい風。

——だから、毎年恒例の桜の開花がやってきた。

教室からは桜の花が見える。教室の横側にある窓のすぐそばに桜の木が植えられているからだ。

休み時間だったので、僕はクラスメート何人かと鬼ごっこをしていた。

「もう桜だな」

西風が他の奴とはしゃいでいた僕にそう言った。

西風は生まれつきからだが弱いので、他の奴ら——僕たちみたいにはしゃぎ回ることができない。医者から言われているのだ。

「桜かあ」

昔のことを思い出す。

昔——ときどき西風のことがかわいそうに見えて、

「いっしょにやろうぜ！」

などといった遊びなどに入れようとしたこともあった。けど、も

う僕は中学生だ。あの頃とは違う。僕がそう誘ってしまおうと、西風の心の中にしこりのようなものができてしまうことぐらい知っていた。

「なつかしいな——あの頃」

西風は僕にそう言った。

「そうだな」

本当になつかしく思えた。奈々とか、尚人か、今はどこでなにをやってるんだろう。

たった一ヶ月離れただけなのに、とても懐かしく思えた。

小学校の学区は中学校の学区とは違うので、みんなほとんどぼらぼらの中学校に行ってしまったのだった。

「どうしてるんだろうな。あいづら。元気でやってるのかなあ」

「分からないなあ。でも、さ。たぶん、元気だろ。前まで元気だったんだし。そもそも、一ヶ月しか離れてないんだぜ？」

「まあ——そうだけどき。なんか、なつかしい感じがして——さ」
確かに、僕もなつかしく思えたのはなぜだろう。考えてみようとしたけど、疲れたのでやめにした。

びゅう。

教室の開いた窓から風が入ってきた。

その風に乗って、ひらひらと舞うものが中に入ってきた。

——それは、桜の花びらだった。

「桜だ」

僕と西風の声がかぶった。

3

あの女子——そう、この間、古めの文庫本を読んでいた女子は——
僕が気になっている女子は、一番後ろの一番窓側の席にずっと

いる。

なんで動かないんだろう。

なんて、後ろを向きつつ思う。

「おい、そこ！　ちゃんと話、聞いてんのか！」

黒板が設置されている前方から怒鳴り声が聞こえた。

びくっとして、すぐに僕は前を向く。五〇歳は過ぎているだろうと予測される、白髪交じりで最近の悩みは薄毛だという間宮だった。間宮の担当する教科は社会。

僕は社会なんて、歴史なんてなんで覚える必要があるんだろうと本当に不思議に思う。なんで昔のことを学ばなきゃいけないんだろうって思う。だって昔のことを学んだって、なにになるっていうんだ。だったら未来のために最先端の技術とかを学んだ方がよっぽどいいと思うんだけどな。

って本当にどうでもいい戯れ言。ただの戯れ言。

間宮はあまり好きじゃない。というか、だれがあんな白髪じじいのことをいいひとだって思うんだよ。

だから僕はまたあの女子の方を向く。

ずっとあの女子は本を出して読んでいた。表紙は古そうだった。カバーは掛けていなかった。

ふうん。

本の表紙を確認してみると、ずいぶん古そうなよく分からない本だった。もうちょっと新しそうな本を読めよ、とか思ったり、思わなかったり。

それにしても。

なんで間宮はあいつ——一番後ろの一番窓側の席にいる女子——のことを注意しないんだ？

本を出しているのに！

なんで僕だけ注意してあいつには注意しないんだよ！

ひいきか？ えこひいきか？ そうかそうか、教師っていうのはそういうもんだもん！ そういうひいきするやつらの集団だもん！ 学校っていう組織はな！ そうだよな！ そうそうそうそう！ はいはいはいはい！

もうこんなのうんざりだ！

「うるさい！」

間宮がブチ切れた。白髪のがじいがキレた。

「出て行け！ 授業受ける気が無いんだったら出ていけ！」
はいはい。

そーですかー。

「お前みたいな白髪の薄毛がじいがやる、つまらない授業なんてだれがちゃんと聞いてんだよ」

「……おい、今何言った」

間宮が反応。

「耳悪いなあ。ホント悪いなあ。だーかーらー。お前みたいなくずがやる授業なんてだれがまじめに聞いてるっていうんだよ、って言ったの。ホント耳悪いし、白髪だし、薄毛だし……ホントくずだな。いやくず以下か」

言いたいことをつらつらと長く言ってやった。

間宮の眉毛がぴくぴくとしている。

さっさとキレろよ。

さっさとむかつけよ。

僕のことを殴ってもいいんだぜ。

まあ、そうしたらお前がやめることになるんだけどな。

ははっ。

黒い僕が存在していることに、その時僕は気がついた。いつからこの黒い奴はいたのだろう。きっと、今まではいなかったんだろうと思う。小学校の頃は純粋な人間だったと自分でも思う。しかし、

中学校から純粋な人間ではいられなくなったのだろうと思う。

中学校は、どす黒い社会と同じような場所だから。

——だから、こういう奴が中にいなきゃいけないんだろうと思う。
大人の階段。

僕はそれを上っているんだろうと思う。

4

結局、放課後、僕は校長室行きとなってしまった。

ふざけんな、あの白髪薄毛じじいめ。

そうやって心の底で毒づきながら僕は校長室の中へ入った。

校長室の中に入ると、これまた白髪で薄毛の校長が目の前で待ち構えていた。

あーあ。

ため息をつくしかなかった。

次の日。

僕はあの女子のことを観察していた。あの女子の観察日記でもつけようかなあ……って思ったけど、よくよく考えてみると、変態のやることじゃないか？ それって。いわゆる——ストーキング行為……。

とにかく、僕はあの女子のことが好きなのだろうか。どうなのだろうか。

最近、なぜだか、胸がときどきとする。この胸の高鳴りはどこからやってきているのだろうかと考えると、どうしてもあの女子の姿が出てくるのだ。

なんでだなんだ。

恋。

か？

そうだ。

きつとそうだ。

これは恋なのだ。

そうなのだ。

あの女子の事をじーっと見ていると、僕の近くに西風がやってきた。僕は西風にあの女子の事を話してみる。

「なあ」

「なに？」

西風は予想通りの返事。

「あいつ、かわいくないか？」

僕はあの女子の事を指さす。

「え？ 三上？」

「違う違う、三上の奥にいるあいつだよ」

「は？ お前何言ってるの？」

「……へ？ お前こそ何言ってるの？ 意味わかんない。あいつだよ。ほら、あいつ」

僕はもう一回びしっとあの女子の事を指さす。
すると、西風は言った。

「……誰のこと言ってるんだ？」

崩壊。

人格が崩壊しそうになる。

意味が分からない。

いみがわからない。

イミガワカラナイ。

意味不明。

いみふめい。

イミフメイ。

は？

はあ？

え？

「お、お前は見えてないのか？」

「何言ってるんだよ。お前には何が見えてるんだ？」

「え、だから、かわいい女子……」

と小声で言った。

「は？ いねえよ、そんなやつ」

「え、じゃあ、見えてるのは？」

「そんなのしらねえよ」

案外西風は冷たかった。

「でも、そんな人間はいないことは確実——というか絶対だ」
「じゃあ……オレは……何を見てる……のかな……？」

そうして、西風に訊いてみるけど、

「しらね」

と言われてしまった。

西風はホントに冷たい奴だ。

5

確かに、僕もいろいろと不思議に思っていたところがあった。
制服が違う点。

間宮が怒らない点。

皆が話しかけない点。

よくよく考えてみれば、おかしい話だと今気がついた。

「……………」

夜、僕は一人、自室のベッドで考える。

あの女子はいったい誰なんだろうと。

本当の——正体はいったいなんだろうと。

考えていると、突然、母親が室内に侵入してきた。

「ご飯だよ」

それだけを言って母親はどこかへ行こうとした。すると、母親は立ち止まった。僕の室内にある、ハンガーに掛かった制服を見て、ぼそつと言った。

「制服……変わっちゃったのよね……あの制服が懐かしいわ……でも……あれだけは思い出さなくなかった……あの事件がなければよかったんだけど……」

それから、母親はこめかみのあたりを手で押さえながらどこかへ行ってしまった。

制服、変わった。

むむ。

……むむむ。

——って、まさか、あの女子が着ていた制服って。

僕はある結論に達した。

そう。

あの制服は、今僕が通っている学校の前の制服——ということだ。
なんでそう仮定できるのかというと、この近くでは制服をリニュー
アルした学校は無いからだ。

ということは、あいつは僕達の学校の昔の生徒——つまり、僕達
の先輩だ。

そして、あの制服のままということは——。

たぶん。

幽霊。

なのだろう。

ただ——なんであの女子は、ここにいるんだ？

6

僕は自分の仮説を西風に話してみた。すると、

「へえ、興味深いね……」

と言われた。

そう。本当に興味深いのだ。

なんであの女子は、制服のままで……そして、学校にいるの
だろう——。

ということが。

「調べてみるか？ 制服が変わる前までのことを」

「え、どうやって？」

「あのなあ……簡単なことだろ？　こくら辺の事情を知ってる奴なら」

「あ」

「分かったか？　たぶん、お前が思ったことは正解だ。——その通り。訊き回るんだよ。その頃——何があったのか」

+++

その日はどちらとも部活がなかったので、僕と西風は訊き回った。知らない家の人にも、丁寧な言葉で訊いた。中には僕達の話すら聞いてくれない人たちもいたし、内容だけ聞いてあとは何も言わないとか、そういう人たちもいたけど、めげずに僕達は訊き回った。

すると、何軒か回ったら、ある情報が入った。

「ああ……思い出すわねえ……あの事件のこと……」

その情報をくれたのはクラスメートのおばさんだった。

「なんですか？ その事件って」

「いや……ねえ……これはタブーっていうか——そう、禁句みたいになってるからあんまり言っちゃいけないらしいんだけどね……私たちが学校に通ってたときにね……」

そこでおばさんの言葉がぴたっと——止まったかと思ったが、すぐにおばさんは言葉を続けた。

「知ってる？ 大きな桜の木。今もあるでしょ？ ……あ、でも確か……その後にそういうことは次の代に伝えちゃダメだからって言って、切っちゃったんだっけ……とにかく、そこでね……首つり自殺があったのよ」

おばさんっていう生き物はいろんなことを話したいらしい。まだまだ話は続く。

「その時に自殺したのはね……生徒だったのよ。わたし、その子と

クラスメートだったから知ってるんだけどね……いっつも一番後ろの席で本を読んでいたのよね」

首つり。

自殺。

本。

生徒。

もう全てがつながったも同然だった。

※ 【エピローグ】

——もう、桜が散る。

そして、もう——僕の恋も終わる。

人生初の恋も。

霊っていうのはあるものに取り憑いているから、そのあるものが

無くなってしまおうと、霊はいなくなってしまう。

——とか、そんな噂を前に聞いたことがあるからだ。それが本当なのかどうかは知らないけれど。

今回の場合に、その噂を当てはめてみる。すると、どういうことになっているのかを考えてみれば、もうすぐ、あの女子は消えてしまふっていうことが分かった。

まず、あの女子は桜の木にひもをくくりつけて、首を絞めて死んだ。そこで、その桜の木に取り憑く。

成仏できなかったからだ。

しかし、すぐに、桜の木は切られてしまう。なので、きっと、その周りの桜——それとも、周りの桜の花びらに取り憑いたのだ。

そして——もうその桜も、散ろうとしている。

散ってしまえば、あの女子もいなくなってしまう。

恋も終わる。

そして——もうその桜も、切られてしまう。害虫の駆除が大変だから、だそうだ。

切られてしまえば、あの女子もいなくなってしまう。

もちろん、恋も終わる。

そう思いながら、僕は、昔あった大きな桜の木の切り株の前でただただ立っているだけ。

「……………」

いつまでも、桜が咲いていれば——。

この恋も終わらなくて済むのに。

でも。

必ず『終わり』は来るものだ。

と。

ふいに。

びゅう。

風が吹いた。

後ろを振り返る。

花びらが舞う。

手のひらを空に向けて出す。

ひらひら。

その桜の花びらの一枚が、僕の手のひらの中に入った。

それから――。

びゅう。

もう一度風が吹き、桜の花びらが勢いよく舞った。

そして。

ふと。

その花びらの中に――

あの女子の姿が見えた気がした。

fin.

ぼくの日常的失恋

にちじょうてきしつれん

村高光一

むらたかこういち

1 出 会 い

僕の名前は高橋風介。

赤ん坊のとき風があたるのが好きだっただからだそうだ。しかし、僕が生まれてからお母さんは事故で死んだ。

お父さんは僕が小3になると家事のほとんどを僕に教えた。

中1になると、お父さんは夜遅くまで仕事で1く2ヶ月に1回ほどしか帰ってこなかった。

中学になって引越してきたので、友達が少なかった。

しかし、入学してから、一目惚れの女子がいた。

髪はショートカットの女子だ。

本当に一目惚れだった。話をしてみたい、もちろん周り

に知り合いがないのでなおさら恥ずかしい。

入学して1週間、ぼくは周りの人達と話していない。というか、授業の時に発言するぐらいしかない。でも、クラスメートの名前はすぐに覚えた。我ながらいい記憶力だと思う。

土曜日、スーパーに買い物に行くと、ショートカットに髪を切っている後ろ姿を見かけた。少しぼーっと見ていると彼女は僕に気づいたようで振り返り、「あ、高橋君。」

「え、あ、どうも。」

なんと一目惚れした女子に会ってしまった。なんとすごい運なんだろう。しかもあつちから話しかけてくれたのだ。

「高橋君っていつつも一人だけど、元気なの？」

「え、そんなつもりは……周りに友達いないし。」

「じゃっ私最初の友達でいい？」

「へ？今なんと？」

聞き返してしまった。自分の耳が信じられない。

彼女が最初の友達？

考えただけで胸の鼓動が早くなる。フラフラしてきた。

「高橋・・・君？」

「あ、いや、ごめん。なんか友達できるのがこんなに嬉しいとは思わなかったよ。」

「ウフフ。んじや握手。」

彼女と握手をした。力強い手だった。暖かい手だった。顔を見ると、まるで女神のような笑顔だった。ああ神様。ありがとうございます。女神様と握手ができるなんて、この手洗わないよ！

「えゝ汚いなあ高橋君」

「え？何が？」

「だつて私と握手した手洗わないんでしょ？」

当たり前だろ、というか、

「え、ナ、ナンノコトデスカーワタシソンナコトハー。」

「アハハハハ高橋君つておもしろいねえー、自分で言つてたよ。この手洗わないよ！つて。」

「あ、思つてたこと言つちやつたのかな、アハハ。」

「うんうんそうだと思うよ。高橋君つて面白いよ。好きになつちやつた。」

え？好きに？い、いやまだあつてから5分もしてないよ。ちよ、ちよ、そつちから告白とは早いな！んじや両思いかあー。

「たーかはーしくーん！好きになるつて異性ではないぞー。友達になつて3分もたつてないよー。」

ですよ。まだ3分もたつてないよ。でも異性としてだ

ろうが友達としてだろうがペットとしてだろうが物としてだろうが、好きは好きでかわりないからめちやくちや嬉しい。

「高橋君、一人で買い物？えらいね。」

「一人……っていうかお父さんもお母さんもないし、ま、お母さんは事故死、お父さんは仕事で全然帰って来ないよ。お金はお父さんがちよくちよく銀行に払ってるから平気だよ。」

「あ、そうなんだ。ここで立ち話もなんだし、うちんち来ない？」

「え？いいの？マジ？こんなヤツ入れていいの？」

ああもう幸せだ。好きな人と好きな人の家で話せるなんて。僕って幸せもんだなあ。

「じゃ、いこつか。」

そして僕は彼女に連れられ家に行くことになった。
好きな人に連れて行かれる。幸せな事だ。
しかし内心不安でもあった。失恋をまた僕はしてしまう
のか？

2 失恋

連れて行かれてる間僕は考えた。
僕はこれまでに5回失恋している。
どれもこれも最悪な失恋だ。
小学校1年の時、好きな人がいた（失恋の話だからいる
のは当たり前だけど）。

一緒に帰っていた…というより帰る人が1年のとき周り

にいなかつたから後ろにいた。前に4ゝ5人、後ろに僕一人。

僕は途中で道路をわたつて違う道に行くので「じゃーねえー」と言つて別れる。

別れてからいつも考えていた。

僕はなぜアイツが好きなんだろう？というよりどうやって気持ちを伝えよう？ダイナミックに伝えようかな？それともお決まりの呼び出しパターンで伝えようか？

それを考え続けて3ヶ月ほどたつたある日、とうとう気持ちを伝えようと勇気を振り絞り決めた。

いつも通り一緒に帰つて…というかやつぱり後ろについているだけ、その好きな人が「じゃーねえー」と言い道路を渡つた後、

「僕、お前の事が好きだ！全然恥ずかしくないし！」と言つ

て告白した。

そのあと走って家に帰った。家に帰ってから恥ずかしくなってきた。

ああこれでよかったんだろうか。というかよくあんな告白の仕方したよなあ。

家に帰ってから後悔しか頭に浮かばなかった。10分くらい考えたら、ま、いつか人生長いし。で済んだ。

次の日学校に行くのが少し恥ずかしく、少しワクワクしてた。

とりあえず学校に行く。一緒に帰って……じゃなくて後ろについていただけけど。

とりあえず前にいた4、5人の群れに仲の良い男子がいた。

その男子が僕の告白を聞いていたらしく、（かなり大声

で言つたから多分その群れは全員聞こえただろう。僕に、
「お前結構いい告白だつたぞ。アイツ照れてたし」
などと言つていた。

まあ、これは失恋というか気持ちを伝えていただけだと思ふ。別に返事きてないし、ま、いつか。で終わった。

それが小学1年の時の話だつた。

まだある。あと4回も失恋したんだ。

2年の時は特に告白などしなかつた。好きな人は2年の時と変わったけど。

というか僕はころころと好きな人が変わる。見方を変えればみんなかわいいと思う。

例え太つていても、やせ過ぎでも、メガネでも、動物でも、虫でも、地球外生物でも、見方を変えればかわいく見えると思う。

好きな人が何人いたっていいじゃないか。彼女がいたら二股だけど。

好きな人が何人もいるのはいろいろ見方があるっていう証拠だ。

想像力が豊かなんだ。

からかわれたっていい。

例えば太っていても、やせ過ぎでも、メガネでも、動物でも、虫でも、地球外生物でも。

自分がその人を愛していればそれでいい。

人生始まったばかりだ。20歳にもなれば結婚して子供を産んで、家族ができる。

人間不思議だ。口で相手を傷つけることも、感動させることもできる。

その口をどう使うかはその人次第だ。

悪口で使えば、悪口を言われてる側は死にたくなる場合もある。

逆に優しさなどで使えば、心が暖かくなる。

本当に人間は不思議だ。

もし：もしも愛する人が死んでしまったらどうする？

その人は愛する人について行くのだろうか？それとも愛

する人の分も頑張つて生きるのか？

人間、一人一人豊かな感情を持っている。

その感情の出し方を間違えて出す人もいる。

：

あれ？失恋と随分離れていつてたような気がする。

たまに僕は変になる。

お母さんが死んで、お父さんともそんな会えなくなつた。

周りに友達がない。

話す相手がいない。

僕は：僕は話す相手が欲しかったただけなのか？

それで色んな人が好きになつたのか？

こんな事考えたくない。でも将来のためにも過去を振り返らなければ行けない時もある。

よく先生とかが「前を見て歩け」とか「過去を忘れろ」

とか言うけれど、僕は特別なんだ。悪い方での特別。

小さい時にお母さんが亡くなつて、お父さんは遠くで仕事、中でほぼ一人暮らし状態。

過去を忘れろ？そんなの無理に決まつてる。

僕にとって過去の悲しみは未来への架け橋だ。

過去の悲しみがあるから過去を振り返りながら、それを元に普通に暮らしたい。

…。

もう：もうこの話は終わりにしよう：失恋だけを振り返るのはいい。でも、でも：過去の事は振り返りたくない。

過去を振り返りながら、それを元に普通に暮らしたい。

けど、過去を振り返ると辛くなる。ものすごく辛くなる。矛盾してる。けど、僕の矛盾はいい矛盾なんだ。

過去を振り返って将来に繋げる、でも過去の事は振り返りたくない。

なにが正しい矛盾なのかは言えない。でもなぜかいい矛盾だと思う。

もう：もう本当にやめよう。純粹に失恋の話をする。

まあそして小学3年になったら3人も好きな人ができた。

仲の良い男子二人に協力してもらって1日3人に告白した。

今思うと馬鹿みたいだ。さつき言ってたけど何人好きな

人ができたつていいけど。

普通の人なら「1日で3人に告白？度胸あるな。それと恥ずかしいの？」みたいな反応が来るだろう。

全くその通りだ馬鹿みたいな事したんだと思う。僕は。今回だってそうかもしれない。

彼女に会えた。それはいい。

でもどうせ僕は見捨てられるんだ。

3 彼女

僕は立ち止まった。

「どうしたの？高橋君？」

「いや、僕：帰るわ。」

「どうして？せつかくだからお話していいこうよ。」

「いや……いいんだ、もうこんな思いはしたくない……。」

「こんな思い？高橋君過去に何か……」

「……話したくないんだ。僕はもう誰も失いたくないんだ。」

「失う？」

「……」

何も言いたくない。この気持ちを彼女に伝えたくてどうせ彼女を失うだけなんだ。

過去の僕は何も先の事を考えていなかった。

ただ気持ちを伝えて、フラれて、少し仲が悪くなった。

それが5回もあつたんだ。どんどん友達を失っていった。

話す相手がいない。家族がいない。

……何をしてるんだ僕は。ここにいたってしょうがない。

僕は彼女に背を向け走りだそうとした。

しかし彼女がとつさに僕の肩をつかんだ。力強くつかん

でいた。

「待つて、何があつたの？教えて、相談相手になるから。」

「いいんだよ！僕は：僕は：キミを失いたくないんだ！だから話したくないんだ！」

「私を失う？どういふことなの？高橋君！」

「いいから放してくれよ！」

「キヤツ！」

僕は乱暴に彼女を押し退け、自分の家に向かつて走り出した。

キミを失いたくない。だから僕は話さない。
嫌なんだ。もう。この世が嫌になつてきた。

——死のうかな。

この世にもう僕が残つてゐる価値なんてないよね。

ハハッ、なんか色々つらかつたな。家に誰もいないし、

喋る相手もいなかった。

息が苦しくなってきた。全力で走ったからなあ。

僕は少しずつ歩きだした。

今日……死のう。死んじやえば天国で辛い思いはしないよね。

——あれ？僕はこれでいいのか？

待てよ、死んだらどうする？彼女はどのような？僕のこの気持ちはどうなる？

違う、この気持ちを捨てる気で死ぬんだ。

でも、この気持ちが残って死んだらそうするんだろう。

僕の心の中で二つの意見が拵がった。

4 生か死か

僕は家に帰ってメモ帳とシャープンを出して机の前に座つた。

これから、明日まで生きるか死ぬかの裁判を開始する。まず彼女に伝える気持ちについて。

生きたいという否定側だ。

まず僕は彼女のことを好きになつた。

そしてこの気持ちを伝えて付き合いはじめて、いろいろ話したい。

そして結婚して家族ができて幸せに暮らしたい。

後は……あれ？もうおしまい？

もつとあつただろう？あの燃えるような思いが……。

……。

どうでもよかったんだ。あの思いは。

んじゃ死のう。死んじゃえ、うん死のう。

この世は残酷だったなあ。

母親死ぬし、父親どつかいくし。

友達いないし。

………。

こんな事思ってたら、もう夜の〇時になっていた。

海に行こう。

自殺のスポットに行こう。

僕は、黒い服に着替え自転車に乗り海に向かった。

本当にいいんだろうか？ いや、いいんだ、こんな後悔な
んて残らないようにしよう。

——キミが好きだ。誰よりも好きだ。

キミは綺麗で可愛くて気品があつて…。

僕に優しくしてくれた。

こんな僕に。

…いい世の中だったな。
最後に思えてよかった。

これでもう悔いはない。

天国へ旅立つ。

未来のために。

考えてるうちに自殺スポットについていた。

ここから飛び降りれば…。

「待つて！」

後ろから聞き覚えのある声がした。

彼女だった。

なぜか泣いている。

「ハアハア…死なないで…。」

「なぜだい？世の中複雑だよ。いい世の中と思ったり悪い世の中とおもったり。」

「だからよ！ いいし悪いし、五分五分だからこの世界楽しいのよ！」

「いや、悪いけど僕は死ぬ。運命なんだ。」

「死ぬ運命なんて無いわ！」

「あるんだ。僕にはもう家族がない。だから死ぬ、そうだろう？」

「……」

「なにも言えないよね。だって人は嘘をつける。本当は僕なんていなくていいんだろう？」

「違う……」

「うん？」

「違う……。あなたは逃げてるだけよ！」

「そうさ……僕は逃げてるだけだよ。逃げて悪いときなんてない。」

「バカッ」

パチンッ！ ほつぺたを叩かれた。

「なぜだ。なぜ叩く。僕が嫌いだからだろう？」

「だって、だって……」

「とにかくさようなら。警察に連絡しないでくれよ。」

「本当に待って！ 私は……私は……」

カクッ。

「あ！」

「あ。」

膝が不意に曲がった。彼女が言いたかった言葉を聞きたくないように。

崖から落っこちている。

「さようなら！ キミにあえてよかったよ。」

「え……え……高橋君……」

「僕は…、僕はキミが好きだー！」

「私もよ！私もあなたが好きよ！今からそつちに……！」

「来るな！キミには生きて欲しい。来ちゃだめだ。来るんじゃない！」

「バイバイ…。愛しい彼…。」

「僕は：キミの事が：大好きだあああああああ
あああああああ！！！！」

完

おわりに

この本「newo」はどうだったでしょうか？

楽しかったでしょうか？

……え？ つまらなかった？ まあ、それは仕方のないことなのかもしれません。人によって、感覚というものは違いますから。たとえば、みんなが「感動できる」といつている作品でも、自分は感動できなかった、とか、そういう経験ありませんか？ たぶん皆さんも経験があると思います。

つまり、この「newo」に詰めた思いが届く人もいれば、届かない人もいるってことです。僕達は、誰か一人にでも思いが届けばいいなあと思っています。

閑話休題。

そういえば忘れていました。僕達は、今回、東日本大震災で

被害を受けた方々に向けて思いを込め、この「newo」という本を出版しました。

けれど、被害を受けた方々だけに出版したわけではありません。もちろん、ほかの方々にも向けて出版させていただきました。

「newo」は、これからも続く予定です。一応。これから、季刊として電子出版させていただきます。今回は6月で、少し微妙な感じになってしまいましたが、次は8月。その次は12月。その次の次は4月といった具合です。

次回からはもうちょっとボリュームを増やしていきたいと思っています。読み応えがある方が僕は好きなので。

では、8月に出る予定の「newo」の第二号でまた会えるといいですね。

………あくまでも予定ですからね。

編集長

桜居志連さくらいしれん

newo vol.1

<http://p.booklog.jp/book/27661>

著者 : newo_novel

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/newo/profile>

著者T w i t t e r : http://twitter.com/newo_novel

著者メールアドレス : nextworld@live.jp

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27661>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27661>